

## 嵐山地区の改修について

論点：

流下能力増大と景観や自然環境の兼ね合いをどのようにするか。

「戦後最大洪水」という対象外力の設定に基づく整備計画でよいか疑問。

<意見>

嵐山地区においては、優れた景観を保持しつつ戦後最大洪水に対応した整備を行うことは困難であると思われる。堤防の嵩上げや河床掘削を行わず、場合によっては、現在の堤防から溢水することを受入れた上で、被害を最小にするための手段を講じるべきではないか。

景観に対する配慮

嵐山の景観は、近代化以降の観光都市京都の貴重な財産であり、景観の空間的価値を時間変容も含めて特定し、河川整備の実施においては、その価値の本質を損なわないように検討することが重要である。河川と都市が極めて近接しており、それが河川と水辺の空間的利用や眺望性が観光地の魅力となっていることから、治水の重要性も高い地域である。

今後の河川整備実施にあたっては、嵐山地区における都市と川の近接性を保つ眺望性の確保、水面のレベル差、回遊性の確保などに着目し、以下の景観検討の視点を参考にされたい。

### 1) 典型的風景の視点場を維持する

中之島（嵐山公園）の河原、護岸、それに隣接する道路などに代表される河川の沿った視点場は、嵐山、亀山と桂川の風景、そこを舞台とした祭りの風景、桜を鑑賞できる回遊的な視点場である。このような視点場の確保は観光地にとって極めて重要である。改修によって一部の視点場を失うことになった場合には、山辺と川辺に囲まれた範囲の中で回遊性を確保できる代替の視点場を創出する必要がある。

### 2) 都市と川の一体性を維持する—眺望の連続性を確保する—

都市側の道路と河川区域の境界部分は、回遊性からの多様な風景を鑑賞する重要な視点場であり、両者の相互の眺望が連続的（一体的）であることが大切である。これは過去から現代へ引き継がれている景観の特性である。したがって、眺望を遮蔽する高い擁壁や堤防、防護策が無配慮に出現することがないようにデザイン的な配慮をする必要がある。（道路の転落防止柵のみであり、町と川の双方の眺望が確保されている）

### 3) 水面と視点場の適切なレベルを維持する

・護岸公園から水面まで2.5m程度であり水面への近い視野が魅力を保つ。このような水面と人の活動、鑑賞場所の適切なレベル差に配慮する必要がある。同様に、川に隣接した建築や船着き場と、水面との関係はそのレベル差はヒューマンスケールの限定的な関係であり、身近に見える水面の確保が重要である。

### 4) 景観のテクスチャ表情を維持する

護岸など河川構造物は、自然石の貼り付けによる自然石護岸である。周囲の自然や建築素材の色調に調和するようなテクスチャや色彩を含めた素材への配慮が必要である（石積み護岸などの利用）。

また、落差工による流水表情も代表的な水辺景観の重要な要素となっており、整備後も維持する必要がある。

### 5) 山辺の視点場からの景観検討

河川から離れた中景域の山側からの視点場には、法輪寺、天龍寺（十景）など古くから特定された重要な視点場がある。整備事業実施によって、これらの視点場からの眺望の変化が許容範囲にあるものかどうかを検討する必要がある。通常、景観眺望の検討では、空気遠近効果を含むCGシミュレーションによる予測資料や眺望視野を用いて検証を行う。

その他

広い川幅の中に土砂が堆積し、陸地ができて、樹木が育っている。

松尾橋より下流では兩岸に樹木が生い茂っている箇所もある。

これらは洪水の安全な流下を妨げるため、取り除く必要があろう。